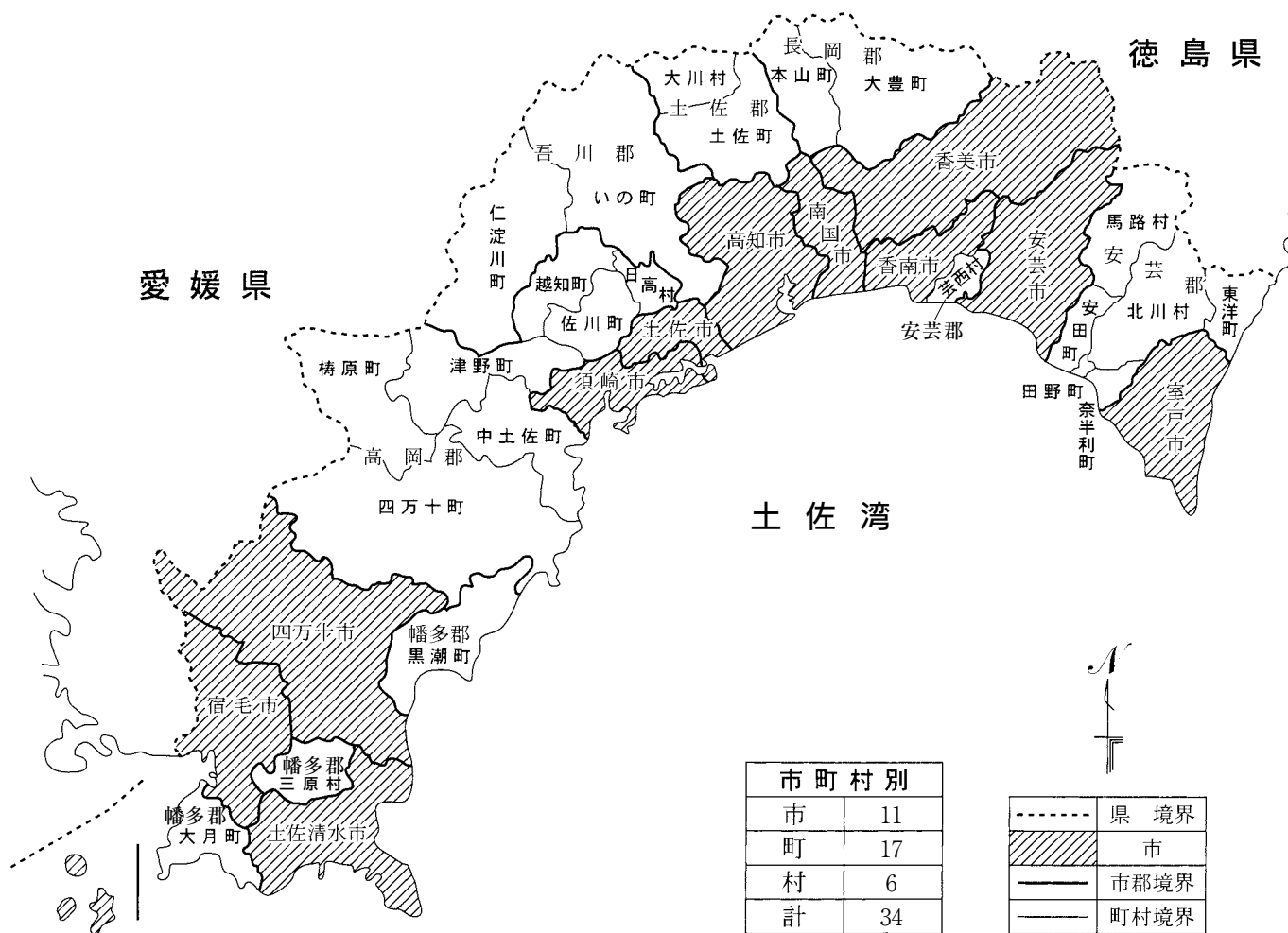


高知県の概要



(令和7年4月30日現在)

沿 革

国産みの神話では、土佐は建依別（たけよりわけ）と呼ばれ、雄々しい男の国とされている。地勢、風土、気質、どれから見てもよく土佐を表した名であるといえる。

流人文化

土佐とは遠狭の意であるともいわれ、永い間遠流の国として多くの流人を迎えてきた。土佐の文化は流人によってもたらされ、言語、風俗にも都振りが伝えられ、それが温存されてきたといえる。

主な流人を拾うと、鎌倉時代、承久の乱の三上皇遠島で、土御門（つちみかど）上皇が幡多へ、天平時代、淳仁（じゅんにん）廃帝の皇太弟池田親王も土佐へ、鎌倉時代末、後醍醐帝の第一皇子尊良（たかよし）親王も幡多へ移された。

清和帝の代、伴大納言の応天門放火に連座して、紀夏井（きのなつい）は佐古（現香南市）へ、菅原道真の左遷に長子高視（たかみ）も土佐へ移された。

このほか、道鏡の弟弓削浄人（ゆげのきよひと）、保元の乱の左大臣頼長の子師長（もろなが）、平治の乱の源義朝の子希義（まれよし）、浄土宗の開祖法然上人、伊達騒動の首謀者伊達兵部（だてひょうぶ）などがある。

土佐日記

土佐は交通不便の地で、国外との交通は専ら船便に頼っていた。

古今集の選者紀貫之が土佐国司の任を終えて、京へ帰る船旅56日をかな文字日記に記したのが有名な土佐日記である。

当時の浦戸湾は現在の数倍の広さで、大島（現在の五台山）、葛島、田辺島、比島などを浮かべ、大津、小津などを港としていた。

長宗我部氏

前の関白一条教房は、応仁の乱を逃れて土佐の中村へ移り、ここに京都を模した都を営み、民風を改め土佐国に君臨した。

土佐一条氏をいただいて一時平穏の時はあったが、戦国の兵乱は土佐も例外ではなく、土佐七雄の相争うところとなり、その中から長宗我部元親が台頭して土佐一国を平定し、勢いに乗って四国を統一しかけたが、太閤の四国攻めに遭い土佐一国に返った。

元親の長子信親は豊後国戸次川に戦死し、跡を継いだ盛親は関ヶ原合戦で石田方に味方して敗れ、領地を失った。

関ヶ原合戦後、遠州掛川から山内一豊が入国し、土佐24万石、16代の藩祖となり、明治維新に及んだ。

南 学

鎌倉時代に夢窓国師が吸江に庵を結び、その弟子で五山学僧の義堂・絶海を生んだ。

南学は、宋学の延長の上に南海土佐に発達した学門の称であるといわれている。

江戸時代には、南学を実地に生かした奉行野中兼山の開田、港改良などの土木工事によって藩力を培った。

南学は幕末期に土佐勤王の精神的起源となったが、当時の土佐藩は公武合体（漸進派）と勤王討幕（急進派）の両派に分かれ、これに上士派、下士派の感情が織り込まれ、両派の抗争は土佐勤王党の獄を招く。

やがて大勢は、坂本龍馬、中岡慎太郎らの脱藩者によって薩長連合を果たし、ようやく大政奉還の建白となり、土佐藩は維新功藩の一つとなった。

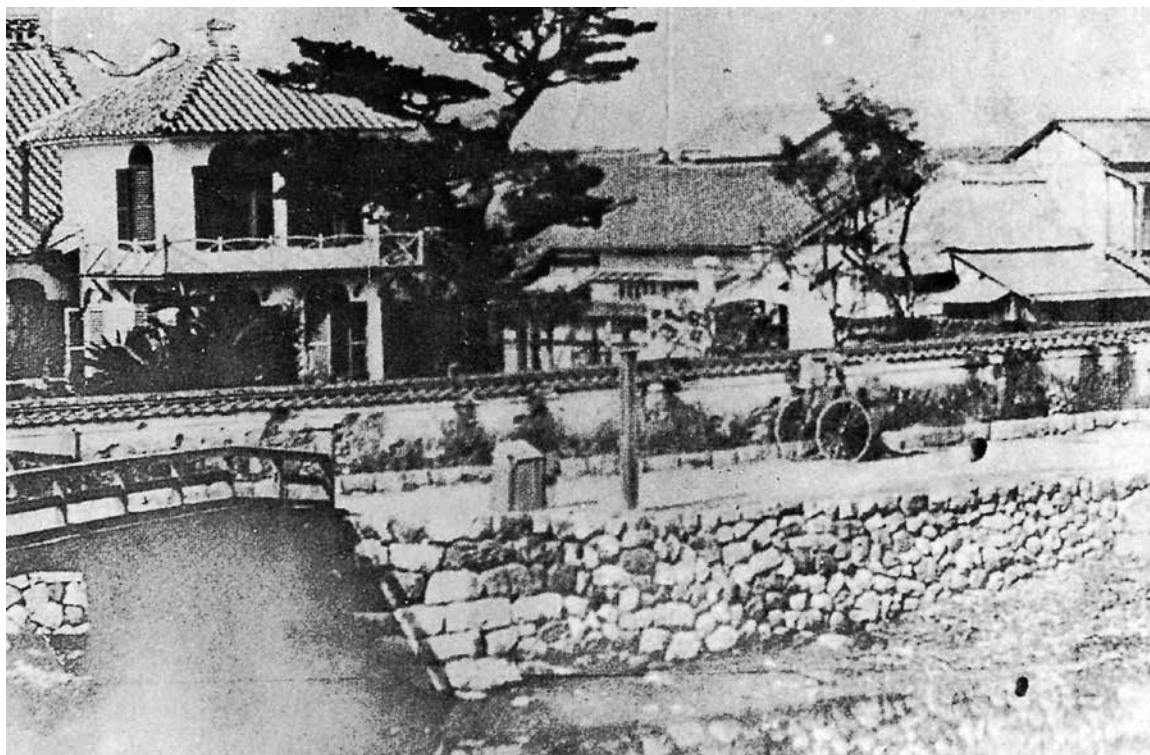
自由民権運動

維新政府は薩長の藩閥政治の色が濃く、土佐人が新政府に占めるところは少なかった。

征韓論を機に、板垣退助、片岡健吉らは野に下って、自由民権運動にその本領を発揮、運動はさらに中江兆民、幸徳秋水らを輩出した。

また、岩崎弥太郎は、維新前後に海運をもって三菱財閥の基を築いた。

その後も、昭和初年の経済危機には浜口雄幸、太平洋戦争後の再建には吉田茂、学道には寺田寅彦、牧野富太郎などの多くの先人を生んだ。



明治7年 立志社創立（現在の高知市帯屋町）

府県会規則の公布された明治11年には、民会的な土佐国州会が立志社の積極的な働きかけにより結成された。

自主独立、自由民権を理念とする州会は、公布された府県会規則が、人民のための府県会には当を失する規則であるとして改正案を上奏した。

政府はこの州会を反政府的な思想に導かれた集会結社として解散を指令、その後県会は、県令（県知事）としばしば衝突し、全国的にもまれな難治県として注視されることとなった。

高知の地名

かつては、城下町が鏡川と江ノ口川に挟まれた地であることから、「河中」と書いてこうちと呼ばれていた。しかし、度々の洪水に遭い、竹林寺の僧の選で「高智」と改め、後に「高知」となった。

高知県の誕生

高知県が誕生したのは、明治4年7月14日廃藩置県のと看で、旧土佐藩の一国を所管した。沖ノ島、鵜来島、姫島は一時愛媛県の管轄となったが、明治7年に本県に属した。明治9年8月には名東所管の旧阿波国を兼管したが、明治13年3月に阿波国を分離して現在に至る。

現在、行政区画は、高知、室戸、安芸、南国、土佐、須崎、宿毛、土佐清水、四万十、香南、香美の11市と、安芸、長岡、土佐、吾川、高岡、幡多の6郡17町6村となっている。

(市町村数)

現在（平成20年1月以降）	34（11市17町 6村）
昭和47年4月以降平成16年9月まで	53（9市25町 19村）
太平洋戦争終戦時	170（1市39町130村）
明治36年	198（1市14町183村）
明治4年	230区

自然

土地

本県の面積は7,102.28 km²で、全国総面積の1.9%を占め、全国第18位の広さである。また、四国の総面積に対しては37.8%を占め、第1位の広さである。

(高知県)

総面積	7,102km ²
市 部	3,074km ²
郡 部	4,028km ²
全国面積	377,975km ²
徳島県	4,147km ²
香川県	1,877km ²
愛媛県	5,676km ²



室戸市／室戸ジオパーク ビシャゴ岩

資料：国土地理院全国都道府県市区町村別面積調（令和6年1月1日現在）

山 地

本県は四国の南部に位置し、北は四国山地により、徳島、愛媛の両県に接し、南は太平洋に面して細長い扇状を呈している。

また、山地が多く、標高1,000m以上の山岳が100を超えている。県総面積7,102 km²の約83%が森林で、そのうち約21%が国有林。耕地は全体の約4%である。



香美市／三嶺

(主な高山とその標高)

三 嶺	1,893.6m
瓶ヶ森	1,880m
西黒森	1,861m
笹ヶ峰	1,859.6m

筒上山	1,859.6m
ちち山	1,855m
西熊山	1,816.0m
手箱山	1,806.4m

資料：高知県統計書（令和5年度版）

河 川

河川のほとんどは北部山系に源を発し、吉野川溪谷のような深い谷を作り、急流となって太平洋などに注いでいる。水量が豊富で、49(令和5年度末)の水力発電所が設置されている。

(主な河川とその延長（両岸平均）)

四万十川	192,392.5m
吉野川	85,500m
仁淀川	74,365.5m
物部川	66,719.5m
梶原川	64,000m
奈半利川	56,100m
伊尾木川	42,100m
後川	37,385m



四万十市／四万十川

資料：高知県統計書（令和5年度版）

海 岸

県中央部を縦断する仁淀川の河口を境に、東西が全く様相を異にする。東は、浦戸湾を除いてほとんど出入りのない隆起海岸で、西は、浦ノ内や須崎湾をはじめ沈降による入江が多く、山と絶壁が海に迫った岩礁の多いリアス式海岸である。



土佐市～須崎市／リアス式海岸の代表、横浪半島

島 し ょ

長い海岸の割に大きな島が少なく、1 km²以上の島は以下の3島である。

名 称	面積	人口
沖 の 島	10.02km ²	119人
鵜 来 島	1.31km ²	23人
大 島	1.01km ²	429人

資料：高知県統計書（令和5年度版）



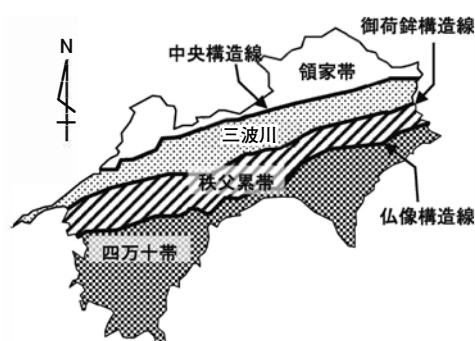
宿毛市／沖の島 この島の周辺は、足摺宇和海国立公園の海中公園となっている

地 質

本県の地質は、ほぼ東西方向に走る御荷鉾^{みかぶ}構造線（上八川―池川構造線）と仏像構造線によって北から三波川帯、秩父累帯、四万十帯に区分されている（右図）。

三波川帯には、主として結晶片岩と呼ばれる変成岩が分布し、その岩石の種類は泥質片岩・砂質片岩・珪質片岩・塩基性片岩などである。

秩父累帯は、秩父帯、黒瀬川帯及び三宝山帯という起源の異なる地質帯から構成されている。秩父帯には、主としてジュラ紀（約2億100万年前～約1億4,500万年前）の砂岩や泥岩が分布しているが、四国カルストや鳥形山鉾山に代表されるように、大量の石灰岩を産するという特徴がある。黒瀬川帯には、さまざまな年代の岩類や地層があり、蛇紋岩が特徴的に見られる。三宝山帯には、主としてジュラ紀～白亜紀（約1億4,500万年前～6,600万年前）の砂岩や泥岩が分布している。



四国の地質帯区分

四万十帯は、本県の面積の約6割を占めるが、その地質は他の地質帯に比べ単調で、白亜紀～古第三紀（6,600万年前～2,300万年前）の砂岩や泥岩が主体となっている。また、県西南部の足摺岬などには、花崗岩が見られる。

これらの基盤を覆って、海岸平野や河川流域の平地には、礫・砂・泥からなる未固結の沖積層が堆積している。また、海岸や河岸の段丘には一部に第四紀更新世（約258万年前～約1万年前）の堆積物が見られ、東西の半島部の狭い範囲には新第三紀（約2,300万年前～258万年前）～第四紀初期の砂岩や泥岩が分布している。

秩父累帯などにある石灰岩や蛇紋岩の分布地は、特殊岩石地帯と呼ばれ、それぞれ固有の生物の生息地となっている。

資料：生物多様性こうち戦略【改訂版】（2019年3月：県環境共生課）

地勢と気象

高知県は、北は四国山地によって徳島・愛媛両県に接し、南は太平洋に面している。東に室戸岬、西に足摺岬が太平洋に突き出し、その内に土佐湾を抱く東西に細長い扇状をしている。

寒い冬の季節は、四国山地が高知県の気候に与える影響は大きく、特に北西の季節風が関門海峡や中国・九州山地の低地を通り四国山地に吹き付けるため、山間部や豊後水道に面した地方は雪が意外と多くなっている。

しかし、海岸地方では季節風が四国山地に遮られるのに加え、黒潮の影響も受けて温暖な気候となっている。

高知県の中部・東部の平野部・海岸部では晴天が多く、冬季としては日照時間の多い地域のひとつとなっている。

暖かい夏の季節には、黒潮上を渡る南寄りの湿った気流が四国山地に吹きつけるため、山間部では平年の年間降水量が3000mmを超える所が多く、東部の魚梁瀬地方では4000mmと日本では有数の多雨地帯となっている。

室戸岬や足摺岬のように海上に突き出た岬や沖の島では、年間を通じて風が強く吹いている。

このように高知県の気候は、温暖な海洋性気候、山間部の内陸性気候、また、多雨気候、低温で雪の降る日本海側の気候、風の強い岬の気候など変化に富んだ気候特性を持っている。



高知市春野町／あじさい街道

資料：高知地方気象台ホームページ「高知県の地勢と気象」を加工し作成

四国各県の気象状況

（令和5年）	年平均気温	年平均湿度	年平均風速	降水量	日照時間
徳島	17.6℃	71%	3.0m / s	1,761.0mm	2,308.8時間
高松	17.6℃	70%	2.2m / s	1,073.0mm	2,207.9時間
松山	17.8℃	70%	2.2m / s	1,399.5mm	2,140.2時間
高知	17.9℃	72%	2.4m / s	2,783.0mm	2,249.0時間

人口及び世帯数

〔人 口〕

戦後10年間増加を続けた本県の人口は、昭和30年の882,683人をピークに減少の一途をたどり、昭和46年頃から少しずつ増加に転じていたが、昭和61年から再び減少に転じ、令和2年国勢調査では、前回（平成27年）の調査からさらに5.0%減少し、691,527人（全国総人口の0.55%、全国45位）となっている。

高知県人口の推移（大正9年～令和2年）

	総 数	男	女
大正9年	670,895人	332,087人	338,808人
昭和5年	718,152	357,166	360,986
15	709,286	348,907	360,379
25	873,874	425,968	447,906
35	854,595	411,162	443,433
45	786,882	372,014	414,868
55	831,275	396,418	434,857
60	839,784	398,408	441,376
平成2年	825,034	389,063	435,971
7	816,704	384,446	432,258
12	813,949	383,859	430,090
17	796,292	374,435	421,857
22	764,456	359,134	405,322
27	728,276	342,672	385,604
令和2年	691,527	326,531	364,996

人口の比較

	総 数	男	女	H27からの増減
全 国	126,146,099人	61,349,581人	64,796,518人	△0.7%
徳 島 県	719,559	343,265	376,294	△4.8%
香 川 県	950,244	459,197	491,047	△2.7%
愛 媛 県	1,334,841	633,062	701,779	△3.6%

資料：令和2年国勢調査

〔世帯数〕

令和2年国勢調査によると、本県の世帯数は、前回（平成27年）の調査から3,739世帯減少し、315,272世帯となった。前回調査から世帯数が減少した5県の中でも、本県の減少率は1.2%と全国1位である。

また、本県の1世帯当たりの人員は2.11人となっている。

総世帯数及び世帯あたり人数の比較

	総世帯数（一般世帯及び施設等の世帯）	一般世帯の1世帯当たりの人数
全 国	55,830,154世帯	2.21人
徳 島 県	308,210	2.26
香 川 県	406,985	2.27
愛 媛 県	601,402	2.16
高 知 県	315,272	2.11

資料：令和2年国勢調査